

は し が き

この研究報告は、当教育センター科学教育部所員、理科長期研修員、地区理科教育センター専任所員研究協力員の研究成果をまとめたものです。

小・中・高校の新学習指導要領が出そろい、小学校では新学期から新学習指導要領で授業がスタートすることになりました。先生方は移行期間を通して、今回の改定の大きなねらいである“ゆとりのある充実した教育”とはどうあるべきかを十分に検討されてきたことと思います。

しかし、時間数の削減、少なくなった教材という条件のもとで基礎や基本を大切にし、いかにいきとどいた指導をするか、また、おもしろく、わかる授業を展開するにはどうすればよいかなど、教師の創意工夫が、今ほど要求される時期はないのではないのでしょうか。

理科教育においては、なんといっても児童・生徒が実験や観察を通して直接自然に触れ、その触れ合いの中から自然を認識していく過程が大切です。さらに、教育効果を高めるためには、実験・観察を数多く取り入れれば良いというものではなく、適当な時期に、適当な場所で、もっとも適当な実験・観察を位置づけることが大切です。そのために、身近な素材を明らかにし、その教材化を検討することも、この時期にとって重要な課題の一つです。

当教育センターでは、これらの情勢を見通して、数年前から指導上の問題点や身近な素材の検討を進めてまいりました。この研究報告におさめた論文も、新学習指導要領に対応した指導上の問題点や素材を検討したもので、その考え方や資料は学校での理科の指導に役立つものと信じます。

また、新学習指導要領では、自然界における人間の位置づけを正しくとらえさせることに重点がおかれておりますが、その指導の一助として、現場で広く利用されることを願って、生物野外観察指導の実践的研究—その2—を載せてあります。これは、身近な自然から、いかなる観点のもとに素材を選び、どのような手だてで観察させていくかについて、ここ数年来、授業実践を通して研究してきたものです。この内容については、いずれまとめて、より充実した形で発刊する予定です。

したがって、ここに載せたものは必ずしも満足のいくものではありませんが、野外授業の展開に十分利用できるものと考えます。

しかし、これらの論文の中には引き続き研究を要する内容のものもあり、また、研究の進め方や結論の導き方に不十分なものもあるかと思しますので、お気づきの点は、率直な御指導と御批判をいただけたら幸いです。最後に、これらの研究にあたり、御助言をいただいたり便宜を与えてくださいました各位に厚くお礼申し上げます。

昭和 55 年 3 月

新潟県立教育センター所長 風 巻 友 重